

正 宗 白 鳥

紅

塵

紅

塵

正宗白鳥著

明治四十年九月十八日印刷
明治四十年九月二十二日發行

紅塵奧付

定價六十錢

著者 正宗白鳥

發行者 西本波太

東京市麴町區飯田町六丁目廿四番地

印刷者 石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六番地

印刷所 株式會社 秀英舍

東京市神田區表神保町二番地

發賣所

彩雲閣

振替口座四一〇五番
(電話本局二六一八番)

不許
複製

序

予は幼時祖母から岡山騒動の面白い物語を聴き、又八犬傳を拾ひ讀みした頃、行々は自分も小説を書いて見たいと思ひ、小學校卒業當時の作文課題にも、幼稚な馬琴論を書いた程であつた。その後耶蘇教を信仰することになり、全く小説を棄て、宗教書類に目を注ぎ、將來傳道師にでもならうかと思つた。しかし何時の間にか宗教心も消滅し、世の中の事は何もかもつまらなくなつてしまつたが、兎に角生存はしたい、生存するには何か仕事をしなくてはならぬ。その爲に早稻田卒業後六年間いろんな事を書いて來た。茲に集めた短篇小説はその詮方なく書いたものゝ一部である。巧拙は別問題として、予自身にはこれを集むるに當つて多少の感慨の湧くを覺える。予は最早八犬傳心醉時代のやうに世の中が五色の糸で色取られてゐるとは思へない。宗教信

仰時代のやうに、世の中に最善の神意が行はれてゐるとも思へない。
青春盡きんとするの今、過去を顧みれば、よくもかゝる夢を見て満足し
てゐたかと思はれる。しかし數年の後更に今日の我れを嘲ける時が
あるかも知れぬ。

白　　鳥　　生

~~~~~

|       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 舊     | 妖     | 我     | 久     | 批     | 安     | 獨     | 幕     | 近     | 好     | 塵     | 二階の窓  |
|       | 怪     | が     | さ     | 評     |       | 立     |       | 松     | 人     |       |       |
| 友     | 衛     | 兄     | ん     | 家     | 心     | 心     | 間     | 會     | 物     | 埃     |       |
| ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... | ..... |
| 三二七   | 一八七   | 一六一   | 一四七   | 一二五   | 一一三   | 八九    | 七三    | 五五    | 三九    | 二二    | 一     |

# 紅 塵

正 宗 白 鳥

## 二階の窓

今日大學で卒業式が執行された。陛下の行幸があつて、教授や講師は小さいのも大きいのも燕尾服やフロックコートで、鹿爪らしく並んで、卒業生は何れも悦しさに胸に波打たせ、暫らくは恨みも悲しみも失望も寂寞も、人間を苦しめる毒蛇は影を潜めてゐるやうであつた。しかも來年は我身の上だと思へば自分も心跳るを禁じ得ない。

式が終つて、てんでに前途の夢を見て、砂利の音かしましく假正門を出たが、

自分は親々の村山登、今日からの法學士が、卒業證書を黒い紙筒に入れて、四圍の目に入らぬやうに、さつさと急いでゐるのを呼留めて、祝辭を述べ「僕の家へ寄つて遊ばないか、牛でも煮て君が將來の抱負を聞かう」といつたが村山は「明朝の一番汽車で一先國へ歸るんだから」と、來月の再會を約して分れた。村山に分れると急に心細い。彼れには卒業を喜こんで呉れる兩親もあれば、結婚の約も成立つてゐるんださうだ。自分には明年の卒業を待つてゐる者は天下にひとり一人だと張合のない氣がして、森川町の下宿屋へ歸つた。制服を脱いで裕衣一枚で身軽く障子を開け放つと、有難いことには、今日は涼しい風が隣の屋根を越して舞ひ込む。

自分の居間は二階中で一番宿料の廉い四疊半だ。南向きなれど鴨居が低くて、窓は鐵格子である。前は五間許り離れて二階つきの二軒長屋に遮られるが、それでも天氣のよい日に格子からのぞくと、西に富士が屋根と屋根との間から

見える。東には大學の避雷針と工場の烟突とが見える。これ等が朝夕親しむ我が世界だ。境遇が人を感化するとすれば、數年の間にも目にうつるこの四つの者は、自分の頭腦の何處にか潜んで一生を支配するであらう。併し去年の夏物干臺の夕涼から懇意になつた沼田君といふ階下の八疊の廣間を占領してゐる小説家が、「どうも書生々活では世間は分りませんよ、テニソンの詩やスコットの小説にあるやうなもののぢやないからね」といつたのは正當であつて鐵格子から人生の底は窺はれまい。

下宿屋は先月の末から次第に客が減つて、僅かに残つた者も、今日の式が終ると、いそいそ歸り支度に取りかゝつてゐる様子、去年と同じく今歳も自分が九月までの留守番だ、房州へでもと思つたけれど、學資も辛じて一年を支へる位だから、そんな贅澤な真似は出来ない、三年前に母にも死別れてより郷里の知人に保管を托した田地も大抵は賣拂つて、散歩歸りに青木堂で珈琲を飲にも躊躇

せねばならぬ今日、新婚旅行も箱根も大磯も安樂椅子も、明年以後の月日に預けて置いて、この最後の夏は破れ疊に寝ころんで、假綴のスコットの小説でも讀んで暮すことゝ、詮方なく度胸を据ゑた。しかし聲の高い樂天家も今夜の瀛車で中國へ歸るとかて、「今年は端艇で小豆島へ乗切るんだ」などゝ、例の氣焰を洩れ聞くと、瀬戸内海が幻にあらはれて、父もあり母も在せし十數年の昔、弟と二人で内所て漁船に乗つて沖へ漕ぎ出て、退汐に引かれて歸れなくて泣たゝなどと思ひ出される。眞向ひの家はと頭を擡げて見ると、一昨日まで日毎に顔を合せた若夫婦の移轉した後へ、今日新しい借手のあつたらしく、節穴の多い雨戸の開いて、階下では騒しい音がしてゐる。かの若夫婦は他人を交ぜぬ二人暮して、春は夜毎の歌留多遊びの楽しさうであつたが、夏になると障子の隔ての取るので、我々の目が無遠慮に浸入するのを眩く思つて家には不似合なカーテンを垂れた。が、それも飽足らなくて移轉したのであらう。

其の日は夕方から雨が降つて、涼しくはあれど、何となく淋しい。長い廊下に沿うた側の部屋々々は燈火もなく、自分の居間は山中の一つ屋のやうだ。何時もは呼鈴のお召て下女の足音の騒々しいのが今は絶えてしまつた。雨足はますます強く、とても散歩にも行かれぬので、机にもたれたまゝ、天井から壁を見廻してゐたが數多き樂書の中に、これ迄氣のつかなかつた字の跡までが目にく。インキの甚だしく薄れたれど、大學教授の名高き法學博士の名もある、鉛筆の壁畫もある。この四疊半も名譽ある歴史を有つてゐるのだ。自分も行末はどうなるか分らねど後代の住民へ紀念の筆を留めて置かうと腹這ひになつて片隅の柱の半身に羅馬字で姓名を認めた。ペンを置いた所に向いの二階で泣き聲が聞える。引越し早々變だなど、障子を開けて窺いたが雨が降つけるので、向いの窓も鎖つてゝ見えぬ。

「だつて姉さんがあんな嫌味ばかりいふんですもの、私何處へても出て行らさ

すわ」と女の泣聲がする。

「また無理を云ふ。家を出て何處へ行ける。一人なら兎に角、小供まであるんぢやないか」とこれは重味のある男の聲だ。

「お夏だつて、あんなにいぢけてるぢやありませんか、私はどんなことをしたつて暮せなくはないと思ひますから」

「まあおれに任せとけ、又いゝ運も向いて来るよ、おれも一旦お前親子を引受けたのだから、決して悪いやうにはせんよ」

女の涙はまだ止まぬやうであつたが、男は頻りに「おれも男だ」と慰めてゐる。聲といひ言分といひ、如何にも頼もしさうだ。一體どんな男だらう。前の若夫婦は、妻君が可愛らしい丸顔で、主人も随分惚れ込んでたと見え、年中睦まじさうで、一度も怒の聲や泣き聲の聞えず、何時も笑顔が窓に映るので沼田は「あれぢや、亭主殿出世は出来まい、呑みたい麥酒も我慢して女房に裕衣でも

買つてやつた揚句、姦男されても氣がつかない奴さ」と、皮肉を云つたが、自分は世間知らずの爲か、非常に羨ましく思つてゐた。しかし今度の家庭はあれとは大分異つてゐるやうだ。

其の夜は静かなので珍らしくぐつすり寝込んで、翌朝六時頃に目が醒めたが雨は霽れて冷かな朝風が鐵格子から染み込むので、心地よきまゝ暫らく立つたきり、工場の煙筒と睨みつくらしをしてゐた。すると向ひの障子も一面に開いて一軒置いて道の向うの西洋造りまで透過つて見える。窓から顔を出したのは、四十近くの八字髻のみ美しく肥満の男だ。自身に箒を取つて謠曲を謠ひながら掃除をしてゐる。埃を避け／＼十歳ばかりの女の子に衣服を着せてゐるのは、凸頭て獅子つ鼻の口唇の厚い年増だ。かの若夫婦とは異つて此方から一圖に見詰めても別に氣にする風もない。その間階子段の音がして上つて來たのは凸頭と爪二つの女で片隅の鏡臺の前に座つて化粧を始める。どちらが八字髻の妻君

か知らぬがどちらにしても亭主は艶福家ではないわい。

自分は顔を洗つて、南瓜面の下女が掃除をしてる間椽側に立つて背を欄干にもたしたまゝ、

「お梅さん今日は暑くなりさうだね」

「暑くつてもいいわ、これから暇になつちやつて、當分私達の極樂よ」と、春まで「くらつせい」「しらんだよ」といつた者が、柄にない式部言葉になつてゐる。

「お向うには新奇な人が越て來たね、何をする人だらう」

「さうね、誰れかしら」と格子からのぞいたが、「いやな女だね」と、我知らず云つて、聞えたかと顔を引込めた。

「そりやお梅さんのやうな別嬪ぢやないさ」

「また人を冷かして」と、紙幣で打つ眞似をして出ていつた。

しかし見つともない女だ。醜い方では負けを取らぬと思はれるお梅もあれに比べては、まだしも勝つてゐるかも知れぬ。學校と下宿の外は廣い東京に惡意な家庭もない自分にはお向ひが唯一の近親だが、これではあまり結構のお隣ではない。格子越しの目と目のお付合ひも香しくないと、心を轉じて机の前にさちんと座つて、スコットの小説を廣げて義侠の武士や美しいお姫様の夢の如き物語に恍惚としてゐたが、又お隣から小供の泣聲がする。

「この子は何故かう剛情たらう、早く學校へ行かなくちやいけないよ、又伯母さんに怒られるぢやないか」

小供はしやがんだまゝ身動をせぬので、はては瘦せた背をびしやりく打たれてゐる。

「御免なさいよ、母様御免よ」

「ぢや直ぐ行くんだよ」

「だけれどね、私學校へは行くけどね、過日のやうに母さんが一人で何處へか行つちまつちやいやだから」

「なにね、お前さへ柔順しくしてれば、母さんは何處へも行きやしないよ、お前を棄てゝ何處へ行くものかい」

「私ね學校から歸つて母さんが居なければ心配でならないから、何卒ね家にゐて下さいな昨夕も母さんが叔父さんに云つてゐることを私寢間で聞いてたの」

「ぢや早く行つてお出で」

小供は目をこすり／＼鞆を肩にかけて出て行つた。凸額はいやな顔の益々くすんで、窓にもたれて俯首いたまゝ考へ込む。この女にも苦勞はあるのだらう。主人はこの炎天にも勤めに出たと見えて居ないやうだ。階下の臺所は廂に隠れて見えぬが、ばしや／＼水の音がして、誰かが膳や茶碗を洗つてゐるやうだ。

「お時さんお前何をしてゐるんだよ、早く洗濯でもしなけりや、今にお晝にな

るぢやないか」と、下から怒鳴つて、チエツと舌打して、小聲で「出戻りの食客め、何をしてがやるんだらう」といひながら、八つ當りに猫を打つてゐる様子。

「はい、今まゐりますよ」といつて、お時は暫らくちつとして、つまらなさうな風だ。成程この女は妻君の妹で、小供つきの出戻りか、可愛さうに八字髷の先生、大變な苦勞だらうな。五圓の借家に住む位の境涯で、こんな荷物を背負ひ込んで。しかし自分のやうに獨りつばちの手頼のない身から見れば、肉身の者のゐるのは幸福であらうのに、何故愉快に暮さないんだらうと怪まれる。やがてお時は大儀さうに下りて行つて、姉の邪慳の口にかゝつてゐたが、最早よくは聞き取れなかつた。

自分は再びスコットに歸つて凜々しい武士が栗毛の駒に跨がつての鹿島立、雪深きカンパランドの湖邊に敵の謀者に行あつて、細身の槍をかまへて詰よる意氣込華やかな叙事に、封建の世相の目に浮ぶが如く、一行毎に感服の聲を放つ